

## ライブニッツを弔う

長岡半太郎

詩聖シエークスピアが歿してより爰に三百年なるに、吾人は將に、世界の大哲ライブニッツ(G. W. Leibniz)の二百年祭を催さんとする曉にある。詩聖と大哲とは毫も因縁あるにあらず。其歿年に一世紀の前後あるは、恰もトラファルガル海戦後一世紀にして日本海海戦ありしと一轍、偶然なりと申すより他はない。シエークスピアは數世紀間其詩を以て世界の耳目を聳動したが、ニウトンと微積分の発見を以て、數物界に並び称せらるるライブニッツは、其万能なる才学を以て古今に卓越した。其二百年忌に本誌が三百号に達したのは無論偶然であるが、爰に其事蹟を追想するは決して偶然であるまい。

本誌に記載する事項は、數学物理学以外の点に接觸する必要がない。然し此興味ある事業の一端を序することは、情緒纏綿して容易でない。殊に微積分の発見に関するニウトンとの論争は、錯綜して、乱麻を解く之感があるから、微分的「スケッチ」をも數頁に為すことは不可能である。ライブニッツはニウトンより若きこと四歳。法律学を修めた。二十歳のとき法科教授として某大学に招かれた。教授として籠中に囚われた鶴に類する生涯を送らんよりは、雲上の鶴となつて飛翔したき志を懷き、聯邦諸侯を歴訪した結果、二十六歳のとき外交的任務を帯びて巴里に使用した。此行が因縁となつて微積分の発見に導いたらしい。当時学界の耆宿として知られたハイゲンスは仏都に滞在して居た。ライブニッツを見て旧知の如く議論を上下した。其微積分の発見は巴里滞在後に発表されたことより推せば、其多少関係有りしことは揣摩せらるる。殊にライブニッツが開発せしエネルギーの數量的觀念は、淵源をハ

イデンスに索むべきは、疑いも無いことである。活力と死力との名の下に、今日所謂運動エネルギーと位置エネルギーを判然区別したのは特に記録すべきである。

微積分の発見が諸方面に偉大の効果を奏せしことを読者に紹介するは、釈迦に説法たるの嫌あれば記述せぬ。然し其発見当時は之を理解するもの僅少であつたから、其理學上の価値を認むるものは稀であつた。それにも拘らず、ライブニッツの眼識は非凡であつた。彼は傲語した。吾人は後世の為に尽瘁せねばならぬ。吾人は大廈を築いでも之に住居せぬことが屢々ある。果樹を植えても其果実を拾うものは後世子孫である。微積分の如きは此種のものであると自ら慰めた。是に由つて之を觀れば、彼れが造化の寵兒を以て自ら居り、天民の先覺を以て自ら任じたる大抱負を覗うに足るのである。

彼れは実に博學達識の人であつた。ニウトンと年代を同うし微積分を開発したことは數物界に既に膾炙するところである。彼れは哲學に關し独特なる意見を發表して一派を闢いた。彼れは法律學を研鑽した。彼れは宗教統一に就き企画を懷抱した。歴史的攻究を以て、彼れは汎く知られた。又作詩にも長じた。樽俎の間に折衝し、良外交官として名聲を博し得た。当時東洋貿易を壟斷した荷蘭を抑制するは、埃及遠征を決行するに如かずとの意見を鼓吹し、路易十四世を慫慂したが、ナポレオンに至り英國に対して初めて此手段は實現せられたのも面白い。學界の振肅を圖らんと欲し伯林及び彼得堡の學士院を創設した。彼れが學者を收攬する器量ありしことを証明して居る。是等は單に其事業の一端に過ぎぬが、其の手腕の古今に懸絶して居たことは推測せらるる。見よ万能を以て自ら誇りしフリードリッヒ大王は彼れに一籌を譲り、ライブニッツは彼れ一人にして既に學士院なりと賞嘆したではないか。昔嘶に見ゆるミダス王の杖は、一度物に觸るれば凡て之を黄金化したる如く、彼れが一度没頭した學問には、必ずライブニッツ流の化工を施した。其名が今日に至り益々重きを為して、其偉績を謳歌せらるるは、恰も金剛石が其多面なる稜角より、虹彩燦然として人目を眩耀するが如く、其才氣の煥發するところ、多貌多角、到る所に光輝を

放った。惟うに彼れと匹儔するものは、前に古人無く、後に来者ないではあるまいか。彼れは稀世の人傑であつた。彼れは斯の如く多方面に精神を傾注したから、一生涯安静を得なかつた。列国に使い、君主に謁見して学界の形勢を論ずる等、常に南船北馬の思があつた。従て数学物理学の研鑽は、概ね旅中の散策に属した形跡がある。其屢ニウトンに挑戦したのは、或は揶揄半分の举措に出でたるかと思わるる。ニウトンが一心不乱に数学物理学を攻究せしは模範的である。然るに其の他の方面に対する手腕は、動もすれば平凡以下であつたから、眼界の大小を較ぶれば、両者間に井底の蛙と雲上の鶴との懸隔がある。井蛙は能く其分を守つても雲鶴は却て矜繖の禍に罹る虞がある。彼れは晩年果して顧られなかつた。遂に一七一六年十一月七十歳で歿し、山賊の屍を埋むるが如く何の礼儀も無く、ハンノーヴェルの墓地に葬られた。其創設した学士院さえも沈黙を守つた。啻に巴里学士院に於て、一年を過ぎ、フオンテネルが客員ライブニッツ君の為に誄詞を読んだに止まつた。大哲の最後は斯く悲惨であつたが、二百年後の今日果して如何。其盛名は馳せて東洋方面にも轟いた。其事蹟を照耀する光焰は万丈長きを覚ゆる。予の如き螻蟻の輩が其卓識を觀察すれば、河伯が大海を觀て望洋の歎ありしを追想せしむる。其著眼点の崇高なりしを仰ぎ見れば、靈峰の雲煙裡に明滅端倪すべからざるを感ぜしむる。恨らくはライブニッツを地下に起して、溷濁なる学界の為に糝糠を掃わしめざるを。恨らくは其建築せる大厦の学界に巍然として聳え、其播種せる果樹の收穫饒多なるを眼前に躍如たらしむるを得ざるを。彼れの抱負は爰にありき。彼れは二世紀前既に此盛事あることを予定したりき。敢て問わば、彼れが二百年後東洋人の彼れを弔うことを夢寐に感ぜしや否の一瑣事である。

(大正五年(一九一六)十一月「東京物理学校雑誌」第三百号所載)

- 長岡半太郎著『随筆』（改造社、一九三六年十一月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{mx}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。